環境の世紀 17　第 3 回授業メモまとめ

<u>授業のまとめ</u>

1.　日々の営みと樹木の景観

・　知覚情報の 8 割を占める視覚（風景、景観）による情報に人々の生活は影響を受け、それに基づく行動をとる。さらにその行動が景観を形作る。
・　林床状態、立木密度、樹種等によって印象、その場で人が取る行動が変化。
・　年齢によって空間を選好する仮説あり（開けた場所（若年層）と日本庭園（老年層））
・　樹木の効果…その場の人々を空間、時間、社会的に位置づける（オリエンテーション）
　①　依拠性・安心感を与える　②歴史性の付与　③統一性をもたせる　④季節感　⑤緑陰を与える

2.「緑」に対する人々の認識

・　圧迫感、違和感、道幅を減らすなど、闇雲に植えてはいけない。
・　場のテーマにあった植栽（樹形など)、きちんとした管理が必要。

3.場のコンテスト（文脈）と植栽

・　生態的コンテクスト（自然条件）と都市的コンテクスト（営みの表現）
・　江戸時代：地形の変曲点に景園地、混植が一般的　⇒　現代：等間隔に公園（緑）を設置
・　場のコンテクストに応じた「格」を考慮した植栽、「格」を認識できる植栽が必要。
・　整った美しさではなく、住民の営みを感じる丹精の美しさ（参加型の景観）が注目されている。

<u>疑問点（下村彰男先生からの回答つき）</u>

・　視覚情報からダンスしないなら駒場でダンスしている人はなぜ？
　→　？

・　大学に緑が多いのは七難を隠すためとも考えられる？
　→　古い建物が多く、諸設備が屋外化して、それらを隠すための植栽が見られることは否定しません。しかし、そのように意図的に植栽されたものだけでなく、良くも悪くも長期間にわたって空地（くうち）として維持されたため、徐々に緑量が増加してきたと考えられます。

・　知を象徴するタイルって何？
　→　「タイル」という表現は適切ではありませんでした。失礼しました。中央の東西に延びるイチョウ並木の北側部分に照明と一体化して、駒場の歴史や知を象徴した図案が 10 ヶ所埋め込まれています（いるはずです)。

・　「もののけ姫」のような森を見るとほっとするのはどんな意味がある？
　→　この問いにしっかりとお答えできる知見は持ち合わせていませんが、私自身は以下のように考えています。講義の折りに、人が空間定位する手がかりとしての建物と樹木との差異に関する質問がありました。その際には、樹木は時間定位の側面も持ち合わせているという趣旨でお答えしましたが、十分な答えではなく、むしろ樹木は「場所」に定位する手がかりになり得るという表現の方が良かっ

たように思います。説明用の PPT スライドの表題を「大地とのつながり」としましたが、大樹や大樹の森（ものけ姫のような森）は、その場所とのつながりを象徴し、時空間を含めた「場所」に定位する手がかりとなるのであろうと考えています。検証は容易ではない意見ですが、産業社会そして情報社会へと展開する過程で、人（の暮らし）と「場所」との結びつきが徐々に希薄化してきており、そのことが個人そして社会の「不安」を助長しているのではないかと考えています。大地に根を張り場所に根付いた大樹に自己を投影させることで、ほっとするのではないでしょうか。
（参考書：ｲｰﾌｰ･ﾄｩｱﾝ（1993）：空間の経験，C.N.ｼｭﾙﾂ（1973）：実存･空間･建築 等）

・ 植栽が地形を認識させるとはどういうこと？
→ 「根津神社のつつじ」の植栽を例にお話ししたことだと思います。現代では、都市の基盤である地形を意識する機会は非常に少なくなりました。東京都心部は起伏に富んだ地形上に立地していますが、その起伏よりも高い建物に囲まれ、かつ近代交通機関での移動が多くなって、地形を意識する機会は減っています。植栽によって、斜面や台地端、水際などに人を集めたり注意を喚起したりして、地形を認識する機会を増やすことが大切であると考えています。

・ 近代公園などはいつから作られるようになった？
→ 明治 6 年、政府は「太政官布告」を出し、旧来からの名所を「公園」と位置づけました。これが制度面での都市における公園の始まりです。現在の上野公園や芝公園などは、この折に公園となっています。ただし、形態は江戸時代からの名所のままでした。形態面での近代都市公園の嚆矢は、日比谷公園で明治 36 年に開園しています。設計競技も実施されており、その歴史には近代的形態（近代的風景）を創出する難しさや努力を見て取ることができます。

・ 丹精の美しさとはプロセスの美しさ？歴史性？
→ 人は（街の）風景を単に形として見るだけでなく、空間や環境と人との関わりも合わせて見て取ります。例えば、部屋の散らかり具合から、人となりや忙しさを読み取った経験があると思います。植木鉢群の PPT スライドで説明した丹精の美しさとは、人と、その場所や環境との良好なコミュニケーションを示すものであると考えています。人が、その場所や環境に対して関心や愛着を失ってくると、自ずと風景も荒れてくるのではないでしょうか。

・ 武家屋敷が関東は「ケヤキ」関西は「竹」となった経緯は？
→ ご指摘の史実を知りません。ヤダケ（矢竹）は、弓矢の材料として武家屋敷に植えられていたと聞いていますが、ケヤキについては、現在でも多く見かけるとおり関東地方の農家の屋敷林としてよく植えられたことが知られています。

・ 明治期までの混植はなぜ失われた？
→ 文書で確認したわけではありませんが、明治期の日本での「近代化≒西欧化」という図式に合わせ、西欧型の整った風景が「良し」とされ、都市への斉一な美しさの導入が促進されたと考えられます。ただ、日本でも都市間道路（街道）や参道には、比較的樹種の揃った並木も見られます。明治初

期の東京や横浜において、近代都市街路が整備されるにあたり、それを修景する意味合いで混植がなされたと考えられます。

・ 季節感は海外においてがどうか？
→　残念ながら、この点に関して十分な知見を持ち合わせていません。文学や社会学、心理学などの分野においてしっかりした研究や考察があるのではないかと思います。

・ 場に合わない植樹についても事前にプランされていたのか？
→　植栽の計画や整備は、風景・景観的な視点のみから検討されるわけではなく、生理・生態面や経済面、入手の容易性、そして周辺の建物状況などが関与し、相互のウェイトも状況によって異なります。十分な総合的検討が行われず、周辺建築物との関係やコスト面、入手の容易性での都合から決定されるケースも少なくありません。
　本学に関して言えば、大きく植栽を変化させる場合（大木等の植栽や伐採）には、キャンパスの空間や環境を検討する委員会が、その都度、どのように進めるべきかを検討してきました。しかし、残念ながら本郷あるいは駒場全体での詳細な植栽計画が存在していないため、狭い範囲での都合から決定がなされ、キャンパス全体で整合がとれていないケースも見られます。現在、植栽管理計画としいう形で作成が進められていますので、全体計画ができれば、より合理的に意思決定できるようになると考えています。

感想

・ みどりと景観について考え直すきっかけとなった。
・ 年齢層によって庭のタイプに好みがあることは驚いた。身体が空間を選好、意識まで決定付ける側面が面白い。
・ 見慣れた風景の変化はさびしいのは、景観が空間をオリエンテーションし、安心感を与えてくれていたから、だったのか！
・ 歩道の樹が自転車駐車を誘発していたとは。視覚イメージはすごい。
・ 場の文脈を切らないことの重要性に気づいた。
・ 樹木と心理の関係も面白い。
・ シラカシのドングリをかじってみたが苦かった。リスにはなれないことを実感。
・ 樹木環境によって自分の行動がかなり規制されていることに気づき、驚いたが、その作用は樹木だけでなく、建物やベンチなどにも寄っているな、と思った。
・ 場に暮らす人間やその行動と植栽が相互に関わり、絶えず変化していることが印象的。
・ 都市整備には少し関心あったが、建築物や交通網の整備といった工学的アプローチよりも、今回の授業のようなアプローチのほうが興味を持てた。
・ みどりの効果を聞かされてみるとなるほどな、と感じる。
・ 今まである場で取った行動はその場が提供してくれたり勧めていたりするものだった。
・ 人とスペース、場の関係の話がとても面白かった。

- 今まで植栽という観点から都市を眺めたことがなかったが、今回の講義は納得でき、興味深かった。今後は町を歩くとき、その植栽方法に注意してみようと思う。
- 大学構内も植栽や管理によって学生がすごしやすいよう工夫されていることを知り、興味深かった。
- 130 周年事業の写真は始めは逆に感じた→知的空間作りという取り組みは面白い。
- 京都白川の写真に強い哀愁を感じた。そういうのも安心感を与えると思う。
- 緑＝善とは必ずしもならないことに納得。
- オリエンテーションって相対主義的だなあ。
- 樹木は人の生活に密着し、相互作用していることが分かった。
- 樹木の有無、植栽方法によって全く空間や印象が変わることが分かり面白かった。
- 初耳のことが多く、「そういうものなんだなぁ」と受動一方だったが、帰り道にでも気をつけてみようかなと思った。
- 今まで都心部などにはもっと緑を増やさなきゃと思っていたが単に増やすだけではなく、樹木の効果なども考慮しなくてはと思った。（複数）
- 人々の営みとあった植栽こそ人と自然の共生だと思う。
- 植栽のわずかなさで印象が大きく変わることに驚いた。
- 人が行動するとき、「空間にオリエンテーション」するときに樹木が重要、ということを始めて認識。
- 周辺の樹木には人の影響を考慮した植栽が施されていることが分かった。
- 場の文脈に合わない樹木は、せっかく植えたのにもったいないとも思った。
- 写真でさまざまな景観を見て、その雰囲気への樹木のかかわりを実感できた。